令和４年度病害虫発生予察指導情報
対象病害虫：ネギハモグリバエ（ラッキョウ）

令 和 ４ 年 ６ 月 ６ 日
鳥 取 県 病 害 虫 防 除 所

１　情報の内容

（１）５月１８日現在、園芸試験場西園ほ場のラッキョウ葉から採集したネギハモグリバエ別系統（以下、バイオタイプＢ）の疑いのあるネギハモグリバエを遺伝子解析した結果、バイオタイプＢであることが確認されました。

（２）バイオタイプＢの発生ほ場では食害被害が大きくなることが予想されますので、食害痕の観察と種球ほ場での防除に努めましょう。

２　発生生態と被害の特徴

（１）ネギハモグリバエの成虫は葉の組織内に産卵し、孵化した幼虫は葉の内部に潜り込んで葉肉を食害する。幼虫は成長すると葉から脱出し、地表または地中で蛹になる。

（２）従来の系統（以下、バイオタイプＡとする）では、１葉当たり１～数匹程度で加害するのに対し、バイオタイプＢでは１葉当たり１０匹以上の幼虫で集中的に加害する傾向がある。バイオタイプＢに食害されると、ひどい場合は葉全体が白化する。

（３）ネギハモグリバエは、鳥取県では年６回成虫が発生すると推定されている（鳥取県農業試験場）。弓浜地域では、４月下旬にタマネギ畑で初発が見られ、５月下旬以降、集中的にネギ畑に飛来・産卵する。６月中旬頃には発生のピークとなり、７～８月に密度が高まる。ラッキョウ畑では５月中旬、９月中旬に発生のピークが見られる（中原ら，1968）。

表　ネギハモグリバエ成虫の発生時期の推定

発生回数	平年	2022年
第1世代（起点）	4月中旬	4月中旬
第2世代	6月上旬	6月上旬
第3世代	7月上旬	7月上旬
第4世代	7月下旬	8月上旬
第5世代	8月下旬	9月上旬
第6世代	9月中旬	10月上旬
第7世代	10月下旬	11月上旬

日本植物防疫協会の JPP-NET 有効積算温度計算シュミレーション Ver2 を用いて、
鳥取県地方気象台倉吉観測所の気象データをもとに推定した。

図　ネギハモグリバエによるラッキョウ食害被害の様子
左：バイオタイプＢによる被害葉：葉全体が白化する（赤枠内）。
中：バイオタイプＢによる被害葉（拡大）：葉色の境目に幼虫が透けて見え、白化部の内部では虫糞が確認される（赤枠内）。
右：バイオタイプＡによる被害葉：葉に白い筋状の食害痕が見える（赤枠内）。

3　防除上注意すべき事項

（1）現在のところ、ネギハモグリバエの系統による違いで薬剤の効果が異なるとの報告はないため、防除薬剤は各地域の防除暦等を参考にする。

（2）被害葉及び収穫残さは、二次伝染源となるため、ほ場内に放置せず適切に処分する。

表1　ネギハモグリバエに登録のある薬剤

ラッキョウ	ビリーブ水和剤	1500倍	収穫14日前まで	3回	シハロトリン ジフルベンズロン	3A,15
	プレバソンフロアブル5	2000倍	収穫3日前まで	3回	クロラントラニリプロール	28

表2　ラッキョウで作物登録があり、ネギでネギハモグリバエに登録がある薬剤

作物名	農薬の名称	希釈倍数	使用時期	本剤の 使用回数	有効成分	IRAC コード
ラッキョウ	アグロスリン乳剤	2000倍	収穫3日前まで	5回	シペルメトリン	3(A)
	ディアナSC	2500～ 5000倍	収穫前日まで	2回	スピネトラム	5
	ダントツ粒剤	6kg/10a	収穫21日前まで	2回	クロチアニジン	4A
	アルバリン粒剤	6kg/10a	収穫前日まで	合わせて 3回	ジノテフラン	
	スタークル粒剤	6kg/10a	収穫前日まで			

表はラッキョウでのアザミウマ類に対する登録内容を記載